ここで語られる物語は全てフィクションです。架空の町の架空の図書館、登場する人物も皆、実在の方達とは全く関係ありません。ご了承ください。

その日、カウンターに座る若菜さんに向かって館長が

「ちょっとね、頼みがあるんだけど」

といつになくぎこちない笑顔で切り出したのが、まだ暑さの残る九月の半ば、今から二週間ほど前の事だ。

「話をするって、つまりはどういう事でしょう……？」

不信感露わに館長の目を覗き込む彼女の反応は、おそらく予想していた通りの事だったろう。

「そんな怯えたような顔しないで。ステージの上で、マイクに向かって十五分位、何か話してくれればいいんだ」

「そのマイクの向こうには？」

そこが一番気になる部分なのだという様子の若菜さんに

「そりゃあホールだからね。たくさん人がいると思うけど」

さらりとかわすように、彼女が最も恐れている返事を口にする。

ここ山麓南町では、町のイベントとして毎年、向かいの文化センターで町民文化祭が行われる。

大ホールでは地元の高校吹奏楽部の演奏をはじめ、愛好会によるフラダンスや日本舞踊などが披露され、正面駐車場ではフリーマーケットや、農産品の即売会が開かれる。

華やいだお祭りムードの裏で、時を同じくしてひっそりと、センター内の小ホールでは、町の各分野の方々を集め、様々な事例に則して町の発展を紹介し、次へのステップを考えるためのシンポジウムが開かれる。

その会場で、『農業と図書』について図書館から何か話してくれという依頼が来たのだそうだ。酪農が盛んなこの町らしいテーマだ。

「で、若菜さんが指名された理由は？」

「私が麓南農高出身だからだって」

返却ボックスの本を抱えて歩く彼女の口調が、いつもより弾む。

「それだけ？」

「だそうよ」

「割とシンプルに決められましたね」

「理由が単純すぎる……もう笑うしかない」

なるほど、妙に明るいと思ったら、そういう理由か。

僕等のやり取りに聞き耳を立てていた館長が、椅子を回しこちらを向く。
「お偉いさんなんて義理で顔を出しているだけだよ。何かそれらしい事を並べてくれればいいから。軽く考えて」
「それらしくするのが大変なんです」
「私も、君に押し付ける事で楽をしようって魂胆じゃない。他でちゃんと仕事してるから」
それは勿論彼女も分かっている。少しこぼしたいのだ。
「宮沢賢治でも話そうかな……」
農業と文学との接点として、好感度も高そうだ。
それからずっと、彼女は賢治に関する資料を積み上げ、時間があればカウンター業務の合間にもパソコンを叩いていた。
「何を書いてるんですか？」
と聞いても勿論教えてくれない。
「萩君が町長になれば聞く事出来るよ」
「百年先ですか？」
「ほお、百年後に君はここの町長になっていると？」
「いえ……」

「なら、教育長……それともどこかの校長になる？」
「……なかなか大変な顔ぶれですね」
「そうね」

イベント当日の今日、遅番の僕は十時の出勤だった。駐輪場から図書館まで歩く間にも、地産品販売の盛況振りは目にとまり、風船を配る町のキャラクターとすれ違う。いい天気だ。
準備の為に館長や課長など何人かは、すでに文化センターの方に行ってしまっているという。若菜さんはまだ事務室で新着本を整理をしているそうだ。
「忙しいですか？」
深津さんに一階カウンターで利用状況の確認をする。
「見ての通り」
一階の児童書室には、一組の親子の姿が見えるだけだ。
「朝からこんな。駐車場を使えない図書館なんてこんなものね」
図書館駐車場は、今日は文化センター関係者のみが使用する事になっている。
「二階も？」
「さすがに一般書はもう少し入ってる。あと澤口さんが今、二度目の排架に出てくれたところ。返却ボ

ックスはすごかったんだ」
これを見てと、後ろで片付けを待つ返却本を目で示す。
それならと、僕もそちらの事務処理とブックトラックへの積み込みに回る。
児童書室の若いお母さんは、赤ちゃんを抱っこして椅子に座る。ピンクのワンピースを着た女の子が時折お母さんの元に駆け寄って元気な姿を覗かせては、また書架の並びに隠れてしまう。三歳くらいだろうか。
やがて女の子が、書架の上の方に置かれた一冊の本をお母さんに指差した。お母さんが立ち上がり、その本を手に取って椅子に戻ると、女の子はちょこんとお母さんの前で、床に正座した。
「読んで」
「おうちに帰ってからね」
「今はダメなの？」
「うん、今はダメ」
女の子は納得したのだろう。
「じゃあ他のも見てから！」
元気良く立ち上がる。

「若菜さん、そろそろ行って」
十時半を過ぎた頃になって深津さんが、事務室のドアを開け、声を掛ける。
「そんなに急がなくても大丈夫ですから」
事務室から姿を現した彼女は、黒いスーツに身を包んでいる。
スカートを穿いている所を見たのも初めてだったのだが、加えて今日はきちんとメークをしている。
いつものポニーテールがほどかれ、まっすぐな黒い髪が肩に触れて小さく揺れる。
「あれ、萩君、見とれてる？」
深津さんが僕の顔を覗き込む。
「いえ、あの……」
「珍しいだけだよね」
両腕を少し開きながら自分の身なりに目を落とす若菜さんが、ぽつりと言う。
「私もこんな恰好したの就活以来だから」
作業しやすい綿シャツに綿パンというのが、いつもの彼女だった。
色もベージュやグレーといったおとなしい色合いばかりなのだが、デニム色の作業用エプロンを着けるとそれはそれで綺麗に纏まる。
もっともそれは僕もあまり変わらない。朝、ロッカー室に入ったなら、エプロンを取り出して首から

掛けてしまえばそのまま仕事の服装となる。そういう職場だ。
特に手荷物も無い彼女は、向こうで使う原稿を挟んだクリアファイルを一つカウンターに置く。
すぐに行くのかと思うとそうでもなく、たった今まで整理していた新着本を事務室から抱えて来て、児童書室入口近くの新着コーナーに収め始めた。
深津さんが、若菜さんの後に張り付くようにしゃがみ込んだ。
「あーあ、行きたくないな。このまま棚に本を並べながら時間潰していたいなあ」
人形芝居のような語り口だ。声色を若菜さんに似せている。こういう事、得意な人だ。
「あの……？」
「若菜さんの心の声を吹き替えしてみた。似てたでしょ？」
「勝手に作らないでください」
ピンクのワンピースの女の子が、遊び相手を見付けたとでも思ったのだろうか、傍に来て、ちょこちょこの二人の周りにまとわり付き始めた。
「さくらみ、邪魔しちゃ駄目よ」
お母さんが、声を掛けながらその後をすり抜け、さっきの絵本を手にして受付けに向かう。
深津さんが立ち上がり、カウンターに入る。
「これ借りて行く」

彼女が差し出したのはアンデルセンの童話絵本『えんどうまめの上のおひめさま』。西巻茅子さんが絵を描き、角野栄子さんが訳した小学館版だ。

「久し振りだね」

「この子が生まれたからね、ずっと来られなかった」

知り合いらしい。友達だろうか。歳は深津さんと同じ程度。二十代後半位に見受けられる。長い髪は後ろの低い位置で縛られ、ゆったりとしたエンジ色のつなぎに抱っこ紐を付け、カンガルーのように赤ちゃんを抱える。

身体を思うように動かせない分を、深津さんがカウンター越しに手を伸ばしていろいろと配慮する。僕は深津さんの後に回り、彼女の仕事をサポートする。

「今どの位？」

「七か月になった所」

「お名前は？」

「はるは」

「いい名前だね。どんな字を書くの？」

「そのまま、春の葉っぱ」

差し出されたのはお姉ちゃんのカードのようだ。名前は川本桜美となっている。

「桜美ちゃんは三歳？」
「うん。保育園に通ってる」
貸出カードに書名が印字されると、深津さんは絵本に重ねて川本さんに手渡す。桜美ちゃんはというと児童書室の若菜さんの横で床にペタリと座り、ご機嫌に絵本を開いている最中だ。
「いい子だね」
「ううん、うちでは大変なんだから」
お母さんによくある言葉だ。
その時突然に、桜美ちゃんが叫ぶように大きな泣き声を上げた。
持っていた本を取り落し、まっすぐにお母さんの元に走り寄ると、片方の手でしがみつき、抱っこをせびるかの様子でもう片方の手を上に伸ばし上げる。
驚いたのは、すぐ近くにいた若菜さんも同じようだ。
「何かあったの？」
そっと尋ねる深津さんに、「ううん」と小さく首を振る。
「どうしたの？春葉がいるから抱っこは出来ないよ」
桜美ちゃんは、それでも激しく泣き続けた。
「おばけの絵に驚いたのかな？」

深津さんが床の絵本を拾い上げて、お母さんの元に持って来た。
表紙いっぱいに大胆でユーモラスなおばけが描かれた絵本だ。子供たちにはとても人気のあるシリーズなのだが、その絵が小さなこの子を驚かせてしまったのだろうか。
「おばけ怖かったの？大丈夫だよ。怖くない」
桜美ちゃんは激しく首を振る。
「こっちのピンクのお姫さまの絵本を貸してもらおうね」
そう言って貸し出し手続きを終えたばかりの絵本を桜美ちゃんに見せ、優しく話し掛けるのも虚しく、女の子の声はさらに大きくなった。
思いが通じない……その苛立ちに、桜美ちゃんは喉に力を込め、叫ぶように泣きながら、ピョンピョンとお母さんに伸び上がるように跳ねる。
若菜さんが、深津さんの持つ絵本にそっと手を差し出しておばけの絵本を受け取った。何かを確かめるようにページをめくる。
「若菜さんはいいから、もう行って。時間がないよ」
桜美ちゃんの仕草を凝視しながら、指先でページの縁をなぞる若菜さんには、深津さんの言葉が聞こえないかのようだ。桜美ちゃんの声が高まる。
「春葉が生まれて、今ちょっと不安定なのかも。すみません。あの、お忙しいんですよね。どうかもう

行かれて下さい」
お母さんが若菜さんを気遣い、頭を下げる。
「桜美ちゃん」
若菜さんは女の子に呼び掛けながら、小さく身体を屈め、目の高さを合わせた。
「お手てを見せて」
彼女は桜美ちゃんが伸ばし上げていた小さなその手をそっと取り、指先を両手で包むように握った。そのまま一本々々の指を手際よく、確かめるようになぞる手が、一カ所で止まった。
「ここ、血は出ていないけど、少し切れています」
彼女の示す中指の先端部分にほんの数ミリ、草の葉で切ったような跡が認められる。
お母さんは春葉ちゃんをお腹に抱えたままの姿勢でかがみ、若菜さんの握る指の先に目を凝らす。
「新着の絵本だったので、紙で切ってしまったんだと思います。小さな傷ですけど、指先です。かなり痛い筈です。何より突然の痛みに驚いたのだと思います」
若菜さんが手を開くと、代わりにお母さんが桜美ちゃんの手を握った。
「お指痛かったの？」
涙をまだぽろぽろとこぼしながら頷く桜美ちゃんに、少し落ち着きが戻った。
「桜美ちゃん、ちょっと待っていて」

若菜さんはカウンター後のロッカーの救急箱からキャラクターの描かれたピンクの絆創膏を取り出すと、指先を覆うように貼り、きゅっと握って、剥がれないように馴染ませる。
「もう大丈夫だよ」
少し不思議そうに絆創膏を見つめる桜美ちゃんの頭をそっと撫でる。
「ありがとうございます。あの、何かご予定があるんですよね？どうか行かれて下さい」
「はい。じゃあ行きますね」
立ち上がった彼女は、僕達にも「それじゃ」と軽く声を掛けると、いつもと勝手の違う堅い靴で自動ドアを抜け、走り難そうな足取りで文化センターに向かった。

川本さんは絵本を手提げ袋に収める。数日前から面出しをして置かれていた絵本だ。表紙にピンクのドレスを着たお姫さまが描かれている。そのドレスが桜美ちゃんの着ているワンピースとイメージに重なる。この子がこの絵本に魅かれたのは、この絵が印象的だったからかも知れない。
絆創膏を貼ってもらった桜美ちゃんは、力が抜けたように静かになった。
川本さんは、横でそっと頭を撫でてあげている。
「今日帰ったら、お母さんに読んでもらうのかな？いいなあ」
泣き終えたばかりの顔そのままの桜美ちゃんは、精一杯の笑顔を深津さんに向ける。

「じゃあ桜美、もう少しだけ、あっちでご本を見ている事出来るかな？」
促された桜美ちゃんは
「もう少し？うん」
声にはまだ涙が混ざっていたものの、思いのほか元気な様子で、児童書室に走り出す。
「走らないでね」
お母さんの言葉に、振り返り頷く。落ち着いたその様子を見届けた川本さんは安心したように、深津さんに向き直った。少し、冴えない表情を浮かべながら……

「図書館って、本の内容について相談って出来るの？」
「相談の内容による……かな」
切り出したものかどうか、悩んでいる素振りの彼女に、深津さんは静かに次の言葉を待つ。
「ねえ……この童話って、深津さんは読んだ事ある？」
「うん、随分前だけど」
「じゃあ内容は覚えている？」
「うん」と頷いた深津さんは「まあ、あらすじ位は」と少しあやふやな顔をする。
「私は、さっき初めて読んだ。で、変な感じがした」

変な感じ……漠然とした表現に、深津さんがもう少し先を聞き出そうとする。
「本当のお姫さまってどういう人かっていう事。読んでいて『変だな』って思わなかった？」
「うん、まあ、それは……」
川本さんの持つ疑問は、ある程度予想出来ていたのだろう。その先を深津さんも詳しく聞こうとはしなかった。
「私はこの本を一体どんな風に、あの子に読んだらいいのか分からない」
「どんな風に読む？」
深津さんが、彼女を見返す。
「そう。例えば、泣ける話なのか、笑える話なのか、感動的な話なのか、怒るような話なのか……そういう心の込め方って言うのかな。どういう気持ちを桜美に伝えていいのか、分からない」
「語り口の作り方、という事？」
深津さんの問いに
「うーん……そういう事だよね。とにかく全然何を言いたいお話なのか分からなかった。そうすると感情が入れられないでしょ？どうしても棒読みになっちゃいそうな気がする」
まだ小さな桜美ちゃんには、それはどうでもいい事かも知れない。お母さんに寄り添い、絵本を開き、声を聞きながらひと時を過ごす……それだけで十分に幸せな時間となり得ただろう。けれど、川本さん

はそこに安住してしまうつもりがないのだ。
「そっちの椅子に座ってくれる？」
深津さんはカウンターの一つ奥にあるレファレンス用の椅子に川本さんを導いた。

『えんどうまめの上のおひめさま』或いは『エンドウ豆の上に寝たお姫さま』とも訳されるこの童話は、たしかに解釈の難しい話だ。と言うよりも、未だ解釈が確定していない物語と言うべきかも知れない。

たとえ何だかよく分からない話であっても、それが良い物語だと思える作品であれば問題はないだろう。けれどこのお話は全てが奇妙だ。そして、何だかよく分からないままのハッピーエンドを迎える。ストーリーは単純だ。物語はとても短く、文庫本では挿絵を入れてもわずか三ページほどで結末を迎える。

まず最初に物語に登場するのが、ある国の王子だ。王子は自分の結婚相手として「ほんとうのお姫さま」を探している。

世界中を旅して回ったものの、どのお姫さまもどこかほんとうのお姫さまとは違っている。王子は悲しくなってしまう。

あるひどい嵐の夜。お城にひとりのお姫さまが訪ねてくる。髪も服もずぶ濡れ、したたり落ちた水が靴に入り、つま先から流れ出る有り様。

でもその姫は

「私はほんとうのお姫さまです」と言う。

その姫に向かい年老いた妃が

「ほんとうの姫かどうか、いずれ分かることです」と告げる。

そして年老いた妃は、姫には何も知らせないまま、寝室のベッドの上にえんどう豆をひと粒置くと、その上に二十枚の敷布団を重ねる。さらに敷布団の上に二十枚の羽布団を重ねると、姫をひと晩その上に寝かせるのだ。

翌朝、ベッドの寝心地を尋ねられた姫は

「ええ、とてもひどい目にあいましたわ」と応える。

「ひと晩中まんじりともしませんでしたわ。いったい寝床の中に何が入っていたのでしょう？何だか堅いものの上に寝たものですから体中、青く赤くあとがついてしまいました。ほんとうに恐ろしい目にあいましたこと」

こんなに感じの細かい人は本当のお姫さま以外にないという事になり、ついにほんとうのお姫さまを見つけた王子は、この姫と結婚する。

この時のえんどう豆は、博物館に展示された事が最後に書かれ、
『だからこれはほんとうにあったお話なんですよ』と結ばれて物語は終わる。

「やっぱり変でしょ？それとも私が読み違えている？」
相手は世界的童話作家だ。彼女は自分の解釈の間違いや、読み込みの浅さを疑いながら、深津さんに意見を求める。
「そうだねえ……」
深津さんは、そこで言葉を止めたまま、川本さんの差し出した絵本を読み直す。
「私もね、何だか違和感はあったよ。でも子供の時だったからね。何となくそのままに」
「そっか……童話って、そんなものだよね」
亀を助けた浦島太郎が、何故玉手箱なんて渡されて、年寄りにならなければならなかったのか……子供達がこの疑問に辿り着くのは、大抵の場合はずっと成長して、昔話に既に興味を失くしてからだ。
「それにしても……変わらないね」
深津さんの妙にすっきりとした笑顔に、川本さんが首を傾ける。
「何が？」
「妥協出来ない所」

覗き込むような目で川本さんを見つめる。
「このままじゃ、ちゃんと読んであげられないから」
「答えを見付けたいんだね」
「うん」
「萩君、どう思う？」
『どう思う？』……図書館職員に禁句のような質問を深津さんは何気ない様子で僕に向ける。
「そうですね」とだけ応えて口ごもる。
「うちの９類担当の萩君」
「９類？」
突然現れた用語に川本さんが戸惑うと
「要するに物語とか小説を担当している職員ね」
深津さんからの改めての紹介を受けて、川本さんとそっと会釈を交わす。
「解説されたものが何かあると思います。探してみますね」
深津さんにとも川本さんにとも取れる程度に返事を返し、パソコンに向かう。
アンデルセンを扱うのは児童書だけではない。二階の一般書の棚にも解説書があった筈だ。閉架にも古いアンデルセン全集が置かれている。その辺りを当たってみようと思う。

深津さんにカウンターをお願いして、持ち場を離れる。

やがて、それら何冊かの資料を調べてみたその結果は、決して芳しいものではなかった。

このお話を解説している本そのものが殆んど見当たらない。見付けても、そこに書かれている事は、そのお姫さまは「神経が過敏」「細かい事が気になる」つまりそれが育ちが良い人の証しとなる。ゆえに彼女は「本当のお姫さま」と考えられる。その程度の記述がなされているだけだ。それが現在の……いや、昔からのこの物語の解釈なのだ。

「やっぱりそういう事なんですね」

予想はついていたのだろう。川本さんは肩を落とした。

「期待したんです、私が間違えているだけで、本当はちゃんとした答えがあるんじゃないかって。お手数をお掛けしました。でもまあ、この絵本ではピンクのドレスを着たお姫さまなんですから、あの子、きっと喜ぶと思います」

川本さんもまた、桜美ちゃんがこの絵本を手にした理由を、ドレスの色にあると考えているようだ。春葉ちゃんを抱えている彼女も既に疲れている筈だ。何冊もの解説を探した。時間を取り過ぎている。児童書室の桜美ちゃんの事も、そんなに長い時間放って置く事は出来ない。もうこれまでだろう。

「大丈夫、そんな事はありませんよ。この物語のお姫さまは本当に『ほんとうのお姫さま』なんです」

ぎこちなく作られた僕の声が、川本さんに向かって発せられる。突然の言葉に驚いた川本さんが顔を上げ、僕の顔を凝視する。

いえ、違います。今のは僕ではなく……声は、僕の背中からだ。

驚いた僕が振り返ると

「萩君の心の声」

さらりと言った深津さんが愉快そうに笑う。

「深津さん！」

「だって萩君、さっきからずっとそういう顔してるんだもん。どの解説を読んでも『違う、そうじゃない！』って言いたそうで。だから吹き替えしてあげたんだよ」

「勝手に吹き替えないで下さい」

「声、似てなかった？」

「問題はそこじゃなくて」

「あれ、何か問題があった？」

澄ましてそう返されると、僕は言葉に詰まった。

「何か別の答えを持っているよね？」

すっかり見透かされている。

「その答えは、川本さんのためになると考えている。なのに君の言葉を代弁してくれる本が見付からない……だから困っているんでしょ？」

深津さんの言う通りだ。たしかに僕はこの解釈に納得していなかった。探せばきっとどこかに、別解釈が書かれた本があるのではないかと期待を掛けていたのだ。

取り残されたような顔で二人を交互に見ている川本さんに、深津さんが説明を向ける。

「図書館職員って、利用者の方に個人的な見解を語る事は出来ないの。だから彼はずっと、自分の考えを言う事が出来ずにいたんだよ」

僕は、横で静かに頷く事しか出来ない。

「そうなんですか？」

「すみません」

「このお話はこういうお話ではないと思われているんですか？」

「僕は、違うと思います」

お姫さまについて、明らかに誤解されていると僕は考えている。さらにこの王子さまや老妃については誤解どうこう以前に、ほとんど考察さえもなされていないのが現状だ。

「聞かせてくれませんか？」

川本さんの目は真っ直ぐだ。

「私の高校の時の同級生なんだ。だからここだけの、個人的な話として、私からもお願い」
深津さんは地元の東南高出身だったろうか。
桜美ちゃんの為に一生懸命な川本さんを前に、僕は断る言葉を持たなかった。
カウンターに置かれた何種類かのアンデルセン童話集の中から岩波文庫版を手に取り、説明に使用する事とした。数ページで全体が読める為、絵本よりも話がしやすい。

「まず、考えたいのは幾度も書かれている『ほんとうのお姫さま』という結婚条件です。ずいぶん曖昧です。明らかに、わざと曖昧にしています」
「それは分かります。だから読んでいると、ほんとうのお姫さまとはどんな人かと期待します。でもだからこそ結果を知った時に、待ち望んだ結論がこれ？っていう思いでいっぱいになるんです」
優雅さや気品などとは程遠いお姫さまの姿は、読む人みんなをがっかりさせる。
「そして結局、本当のお姫さまとされた根拠は『感じの細かい人』でした。でもこのお姫さまはどの部分で『感じの細かい人』でしょうか？」
「それは、さっきの解説の本にもあった通り、敏感な感覚が養われている、という判断からですよね。何十枚もの敷布団の一番下に置かれた豆に気が付く事が出来、それが気になって眠れないような思いをするんですから。それは、きちんとした環境で育てられたからこそ培われた鋭敏さという解釈ですよね」

基本的な部分。最低限この解釈で間違いがないと思われている部分だろう。
「はい。そうだと思います。けれど、その分析は正しいと言えるでしょうか？」
「違うんですか……？」
短いお話だ。だから、一つ一つのパーツはどれもとても重要な筈なのに、見落とされている事がある。
「このお姫さまの登場の仕方を見てください。ひどい嵐のせいで、どんな様相だったのか」
川本さんは改めて手元の童話集を開き、その文章を確認した。
嵐の中でそのお姫さまは、髪も服もずぶ濡れ、したたり落ちた水が靴に入り、つま先から流れ出るありさまで王子の前に現れる。
「解釈されているような神経過敏な『感じの細かいお姫さま』が不満を爆発させるなら、まずここでなければならなかったと思いませんか？」
深津さんが横で「こほん」と一つ咳払いをすると
『ひどい目に遭いましたわ！見て下さい！髪も服もずぶ濡れ、靴の先まで水が滴って、体中が赤く膨れ上がってしまいましたわ！』
甲高い声で不満爆発のお姫さまを、見事に演じてくれる。
「こんな具合？」
得意気なその笑顔に、川本さんがパチパチと手を叩く。

「何故この時に彼女は何も言わなかったのでしょう？……実はこのお姫さま、意外と辛抱強いと思いませんか？」

この描写が、お姫さまの人柄をとてもよく示している。

彼女は、自分の身がこんな状況にあっても不平一つこぼさない。

「アンデルセンはそれを伝える為に、こんな嵐の描写を設定して見せたんです。みすぼらしい程の姿でお姫さまが登場したのは、決して意味のない事ではありません。そして次に考えなければならないのは老妃の思惑です。二十枚の敷布団の上に重ねられる二十枚の羽布団。何の為にこんな事をするのか。度を超えた布団の枚数は一体何を表しているのでしょうか」

「ただの贅沢を表しているのではないんですね？」

贅沢を表しているように読める。いや、そう読めるように仕込んだのだろう。

「ではこの敷布団が、この国の国民を表していると読むとどうなるでしょう」

「国民、ですか……」川本さんが僕の言葉をなぞる。

「二十枚の敷布団が下層の国民を表し、その上に重なる二十枚の羽布団が、富裕層を表していると考えてみると、どうなるでしょう？王族とは、沢山の階層の国民を下に敷いて、その上に横たわっているものだ……そう読む事が出来ると思いませんか？」

この部分まで伝える事が出来れば、一番下に置かれたえんどう豆の意味に辿り着くのは難しくない。

「えんどう豆が意味するのは、一番下の層の国民が抱えている小さな悩み事です。……それは国家への不満かも知れない。仕事でのトラブルかも知れない。友人や家族との行き違い、個人的な健康の不安……考えられる事は様々です。

いずれにしてもそれ程大きなものではありません。ほんの小さな豆粒です。けれどその一番底辺の、ほんの小さな豆粒一つに気が付く事が出来、その豆粒に苦しみ、夜も眠れないような思いをされ、自身も傷つき、なりふり構わず夢中になって周囲に訴えかける……自分は、嵐の中で髪から靴の先までずぶ濡れになっても不満一つ言わなかったお姫さまが、です。王子はそんなお姫さまを探していたんです。世界中を探しても見つからず、王子が『ひどく悲しくなってしまった』のはそんなお姫さまがどこにもいなかったからなんです。そして年老いた妃は、お姫さまを試そうとしている少し意地の悪い妃のように見えてしまいますが……でも本当は、国中の平穏を願う、本当の妃だったのだろうと思います」

「それが『エンドウ豆の上に寝たお姫さま』の本当の意味……」

川本さんは、本を手に取り、その短い物語に改めて目を落とす。無言のまましばらくの時間を置いた彼女の表情が静かにほどけ、和らぐ。

「そっか……」

「霧が晴れたような顔してるね」

深津さんに言われると「うん」と伸びやかに頷く。

「あくまで、僕なりの一つの解釈にすぎません。そこは、ご理解下さい」
「いえ、十分です。これで、今夜あの子に堂々とこのお話を読んであげられます」
『答えを見付けたい』少なくともその依頼に、応える事は出来たようだった。

桜美ちゃんが駆け寄って来た。お母さんに抱き付きたがるのだけれど、春葉ちゃんがいてそれは出来ない。拗ねた顔を作ってみせるその子にお母さんは手を差し出し、「帰ろう？」と促す。
「じゃあ、この本お借りします」
そっと頭を下げた彼女は、深津さんに向かうと
「いいね、ここ」
気持ち良い笑顔でそう言う。
「萩君？」
「違う、萩さんだけじゃなく、深津さんも、それから……さっきの人も」
川本さんは手を繋いだ桜美ちゃんの指先の絆創膏に、そっと目を落とす。
「また来るね」
エントランスホールへの自動ドアが開く。
「うん。また来て」

桜美ちゃんが、綴じたガラス扉の向こうから深津さんに元気に手を振ってくれる。

「ねえ萩君、もし君の言う通りだとしたら、アンデルセンは何故このお話をこんなにも分かり難くしたの？」

深津さんがカウンターの隅に立ち戻り、調べ事に使った何冊かの中から、あらためて岩波のアンデルセン集を手に取った。

「そうですね……僕は、二つの可能性を考えています」

「二つ？」

「ええ。一つはデンマークという王国に住む彼は、王族のあり方に対して訓戒めいた話とする事が憚られた……という考え方です」

「うん、ありそうだね、確かに。もう一つは？」

「もう一つは、これはアンデルセンが、読者に向けてそっと忍ばせた、ひと粒の小さなえんどう豆だったのではないか……そんな思いです」

「なるほど」

小さく頷いた深津さんは

「最初のも悪くないけど……二つ目の方が萩君っぽい」

こっちを向いて、無邪気な笑顔を作ってみせる。

程なく文化センターから若菜さんが戻った。

「無事に講演終わりました？」

「講演じゃないってば。話をしただけよ。うん。無事に終了～」

いつもの綿シャツと綿パン姿で身軽にはしゃぐ。

「向こうで着替えて来たんですね」

「朝、来た時にはこの恰好だったんだよ。ホールで打ち合わせした時に着替えて、終わった時にまた向こうのロッカーで着替えて来た」

髪も縛って、メークも落とされて、すっかりいつもの彼女だ。

「スーツ姿も……とても素敵でしたよ」

言い難そうに、少しこわばり、口ごもった僕の声が若菜さんに届く。

大きく目を見開き、こちらを見る若菜さんに、僕は慌てて後ろを振り返る。

「深津さん！」

「何？今の」

若菜さんは何だか分からず、キョトンと丸くしたままの目で二人を見る。

「今のはね、萩君の……」
「説明しなくていいですから！」
「後で教えて。取りあえず、これを置いて来る」
彼女は紙袋に入れたスーツと、左手に持ったパンプスを掲げて見せながら階段に向かう。

野菜の販売が予定より早く終了したのだろう、何人かがテントを取り囲み、撤収作業を始めている。その横のフリーマーケットはまだまだ盛況のようだ。
強い日差しの中にも秋が混じる。午後には来館者も増えるだろうか。
「排架に行きながら、これも片付けて来ます」
「うん、ヨロシク」
積み込みを終えたブックトラックの上にアンデルセンの資料を乗せると、僕はゆっくりと職員用エレベーターに向かった。

参考文献

『完訳　アンデルセン童話集（1）』アンデルセン(著)　大畑末吉(訳)　岩波文庫　一九八四年
『完訳　アンデルセン童話集（7）』アンデルセン(著)　大畑末吉(訳)　岩波文庫　一九八四年
『アンデルセンの塩　物語に隠されたユーモアとは』ヨハネス・ミュレヘーヴェ(著)　大塚絢子(訳)
新評論　二〇〇五年
『おとなになって読むアンデルセン』アンデルセン(著)　須田諭一(編)　メトロポリタンプレス
二〇一四年
『アンデルセン童話全集（1）』アンデルセン(作)　高橋健二(訳)　小学館　一九七九年
『アンデルセン生涯と作品　アンデルセン童話全集別巻』エリアス・ブレスドーフ(著)　高橋洋一(訳)
小学館　一九八二年
『えんどうまめの上のおひめさま』H・C・アンデルセン(原作)　角野栄子(訳)　西巻茅子(絵)
小学館　二〇〇四年

本当(ほんとう)のお姫(ひめ)さま　―山麓南町図書館物語(さんろくみなみまちとしょかんものがたり)―

2023 年 10 月 28 日　発行

著者　瑞貴(みずき)くぬぎ

町制施行 60 周年・かんなみ知恵の和館 10 周年記念事業冊子
発行　函南町教育委員会
製本　函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。
（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の
第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。
作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるもの
とします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は
著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。